

チャールズ・ラムを再読して

山 川 鴻 三

私はこのところすっかりロマン派にご無沙汰しておりましたが、この機会にチャールズ・ラムを少し読みかえてみましたので、その感想を述べさせていただきます。

大阪大学を退職しましてから、私は道楽にヨーロッパの美術館めぐりを始めまして、今年の夏もちょっと行って参りましたが、その折にも見て参りました一枚の絵を、話の手がかりとして使わせていただきます。小さな図版なので見えにくいと存じますが、この絵です。ロンドンのナショナル・ギャラリーにある名画のひとつで、皆様の中にもごらんになった方が多いと存じせず。

ティッシャンの『バッカスとアリアドネ』。

インドから凱旋して来たバッカスが、ナクソス島でテセウスに置き去りにされたアリアドネに出合ったところです。バッカスはアリアドネを目がけてひょうの引く戦車から飛び下りようとし、はるか水平線のかなたに消えようとするテセウスの帆影を追って海岸をさまよっていたアリアドネは、首をめぐらせてバッカスと視線を合わせます。バッカスのうしろには、シンバルやタンバリンを鳴らすバッカスの巫女たち、切られた小牛の首を引っぱったり、切られた小牛の足を振り上げたり、身体に蛇をまきつかせたりするサテュロスたち、そして一番うしろに驢馬に乗ったシレノスが従います。

さて、ここです、この絵について、繰り返し歌っているキーツを思い出してみましよう。キーツは *Sleep and Poetry* でも、この絵に描かれた、バッカスの従者たちの優雅な姿と、戦車よりバッカスがすばやく躍り出、彼のまなざしがアリアドネの頬を赤らめさせた有様を簡明に叙していますが、ここでは、*Endymion* の、アリアドネを抜きにした、バッカスの行列の長い描写に



ティッシャム『バッカスとアリアドネ』

目を留めてみましょう。それは、同詩第四巻で、インドの少女が森蔭に坐って Endimion に語る話で、あらまし次のようなものです。

私が丘の上に坐っていたとき、飲み騒ぐ人びとの音が聞えてきた。それはバッカスとその従者たちだった。トランペットが鳴りひびき、打ち合わすシンバルは陽気な音を立てた。

一同は楽しげな谷間を狂おしく踊りながら、憂鬱を追い払うのだった。高い栗の木々が太陽や月をおおいかくす六月に、羊飼いたちがひいらぎの実を忘れるように、私はすっかり憂鬱を忘れてしまった。私はその馬鹿騒ぎの中へ飛び込んで行った。

車の中には、若いバッカスが高々と立ち、踊るようなかっこうで、脇を向いて笑っていた。彼のそばにはシレノスが酔いしれて酒をあおりながら、驢馬に乗って進んだ。

「陽気な女たちよ、お前たちはどこから来たの？ おだやかな家庭を捨てて？」

「わたしたちはバックスについてゆくのだよ！ 凱旋してすばやく進むバックスに。どんなことがあろうとも、わたしたちは世界中で、あの人の前に踊るの。美しいご婦人、あなたもこちらへ来てわたしたちの狂喜の踊りに加わりなさい！」

「楽しげなサチュロスたち！ お前たちはどこから来たの？ なぜ森のすみかを捨てて来たの？」

「わたしたちはぶどう酒のためにどんぐりのなる樹を捨てて来たのさ。ぶどう酒のために地球上バックスについてゆくのだ。美しいご婦人、こちらへ来て、わたしたちの狂乱の踊りにおはいりよ！」

さて、ここまでのところは、ティッシャンの絵のバックスの行列をほぼ念頭において書いていることは、間違いないようです。ティッシャンの絵のアリアドネのいる海岸が、ここではアリアドネのいない丘や谷間になっているという違いはありますが、それを除けばあとはほぼ同じだといえます。

ところが、これにつづくあとの部分は、まったく違って参ります。一行はこの舞台を去って旅をつづけるからです。以下同じくその大略を申します。

わたしたち（インドの少女とバックスの一行）は川をわたり山を越え、虎やひょうやアジアの象に車を引かせ、歌い踊りながら行く。一行は幼児のように笑いさざめきながら、しま馬やアラビア馬やワニに列をなして乗り、たわむれるオールと絹の帆で、海の上をすべる。ひょうの毛皮とライオンの立て髪にまたがって平原を走りまわる。三日の旅行は一瞬でなされる。いつも日の出とともに、荒野のほとりでおこりっぽい一角獣にまたがって槍と角笛で狩をする。

エジプトがバックスの前にひざまずき、エチオピアがシンバルのひびきに目をさまして歌を歌い、酒神の一撃がダッタン人をつらぬくの、わたしは見た。インドの王は宝石の王しゃくを下ろし、宝石箱から真珠をまき

ちらす。わたしはバックスにしたがってここまで来た。疲れはて——ひとりになりたくてわたしはこの森の中へさまよいこんだ。

さて、この後半の部分は、前半の部分の舞台を、ティッジャンの絵のそれとまったく同じではありませんが、これを一応ナクソス島だと致しますと、インドの少女の加わったバックスの一行は、ナクソス島から内陸や海上を通してエジプトに達し、今日のトルコあたりに上陸し、さらにエチオピアから海を渡って今日のパキスタンあたりに上陸し、奥地深くから印度に入ったものと思われまゝす。細かいことはしばらくおくで致しまして、要するに、これは、最初に触れました、バックスがインドからナクソス島へ凱旋したというギリシア神話の話とは逆だということになります。少し脱線が長くなりましたが、バックスの進路が神話どおりであるにせよ、その逆であるにせよ、これから申しますラムとのかかわりで、ここで注目していただきたいのは、絵画がナクソス島での一瞬の出来事を描いているのに対して、詩はナクソス島からインドまでの出来事を歌っているということです。レッシングが『ラオコーン』の中で、空間芸術としての絵画と時間芸術としての詩を区別したことは、有名ですが、絵画が一つの時間を空間的に固定するのに対して、詩は出来事の時間的継起を、大まかに申しますと、ナクソス島の出来事とそこからインドまでの旅という二つの時間を表現するのです。

ところが、ここで話をラムに移しますと、ラムはそうは考えないのです。ラムは画家も想像力の助けによって二つの時間を表現できると主張するのです。そしてその好個の例として、ほかならぬこのティッジャンの絵をあげるのです。『続エリア随筆』の中の「現代美術の諸作品における想像力の欠如」から関係の箇所を抄訳してみましょう。

ぶどう酒をしのぐ新しい情熱に酔い、荒地をたちまちのうちにふたたび賑やかにし輝かしくしながら、よろめくサチュロスの群に取り巻かれてまっしぐらに、火のなかで生まれたバックスは火のようにアリアドネに身を投げかける。これが現在の時間である。……しかしティッジャンは想像的

精神の深淵から過去の時間を呼びおこして、それを現在とともに、ひとつの同時的な効果に寄与させているのだ。荒野はすべてバックカスの従者たちの狂おしいシンバルの音で鳴りひびき、神の出現……のために輝きわたっているのに、アリアドネは——バックカスに気がつかないのか、それともなにか自分とは無関係な行列にただなにげなく視線を投げているかのよう——自分の心はまだテセウスから離れないで——夜明けに目がさめて、テセウスをのせていった舟の最後の帆影が寂しく目にはいったときに劣らぬほどの心の静寂とほとんどそれと同じほどの土地の孤独感にとらわれながら、今なお孤独な浜辺をさまよっているのである。

ここには二つの時点が驚異的にあい結ばれている。すなわち、はげしい雑踏と今なお絶対的な孤独の感情と、意外な真昼の光景とまだ消えずに残っているうす暗い灰色の夜明けの出来事と、現在のバックカスと過去のアリアドネと、二様の時間をもった二つの物語が別々でありながら、しかも調和しているのである。もし画家がこの女をもう少し神に無関心でないように描いていたのだったら、まして、彼女が彼の到着に歓喜を表わしていたのだったら、過去の大きな心の寂しさという物語はどうなってしまっただろうか。身にあまる申し出が喜んでうけ入れられたというなんの味もない物語に没し去ってしまっただろう。セテウスのために打ち砕かれた心は、神でも簡単に継ぎ合わせることはできなかったのだ。

ラムはティッシャンの絵を『バックカスとアリアドネ』ではなく単に『アリアドネ』と呼んでいますが、このラムの議論の要点は、彼が「過去の時間」と呼ぶアリアドネとテセウスの出来事を過大視するところにあります。なるほど、浜辺をさまようアリアドネの左肩のあたりには今まさに消えんとするテセウスの舟の帆影が見え、彼女の右手はそれに合図するかのよう^{よう}に上げられています。しかし、その同じ瞬間、頭をめぐらせたアリアドネの目は、バックカスの熱烈な目に答えているのです。絵はこの一瞬——このひとつの時間——を描いているのです。ラムの言うのとは反対に、彼女の目はバックカスに無関心ではないのです。その点を少し立ち入ってお話しましょう。バックカスの頭上の雲をごら

ん下さい。この雲の左端の線は、バックスの頭部から彼の右肩までの線をかたどっているようです。こんどはアリアドネの頭上はるかな雲です。この雲の上部の線は、やはり彼女の頭部と上げた右手の手先と袖口の白衣の輪郭の線をなぞっているようです。そしてこの二つの雲をごらん下さい。もうひとつの細長い雲が二つの雲をつないでいるのです。これはバックスとアリアドネが結ばれたことを表わしているのではないのでしょうか。

もうひとつ、このラムの議論で目立つことは、ラムがこのアリアドネの心の寂しさを反映するものとして、土地の孤独感、荒地性を強調することです。バックスとアリアドネのドラマの演じられる舞台である、この絵の前景は、美しい花々も咲き競う林間の緑地なのです。ラムの言うような、荒地どころではないのです。

それでは、なぜラムはこれほどまでにアリアドネの心の寂しさと土地の孤独感を、この絵の中に探し求めねばならないのでしょうか。

私は以前に書きました『第十の詩神』の中で、この問題に答えて、それはラムがこの絵の中に自分の体験、すなわち彼が彼の詩‘Old Familiar Faces’で歌ったような、自分のはかない恋の体験を読みこもうとしたからだと申しました。

しかし、ここではもう少し違った角度から、この問題を考えてみたいと思います。

この絵は、ティッシャンのがきわめて若いころに描いた作品のひとつで、ペレンソンなども、この作品を若きティッシャンの代表作としてあげているものです。この絵は、明るく海に開けた林間の空地での、真夏の真昼間の、若きバックスとアリアドネの出会いとバックスの従者たちの陽気な馬鹿騒ぎという、若々しい、一点曇りのない明朗なもので、したがって若い人びとに訴える、若人向きの絵だといえるのです。そのことは、今申しました、若きバックスと美女アリアドネの恋とバックスの従者たちの陽気な馬鹿騒ぎという、その題材からも明らかですが、ここではその色彩の鮮やかさに注目してみましょう。

この絵は、色彩の調和の点で早くから賛美されてきましたが、サー・ジョシュア・レノルズも *Discourses* の中で、それを暖色と寒色の見事なバランスに

帰しています。すなわち、この絵の左方アリアドネと背景の海と空は青の寒色ですが、右側の群集はほぼ暖色系に属します。これに変化を与え、バランスを取るために、画家は左方のアリアドネに暖色の赤のスカーフをまとい、右側の群集のシンバルを打ちならすパッカスの巫女に寒色の青の衣裳をまといさせている、というのです。

それにしても、その色彩の微妙な変化、gradation の何と見事なことでしょう。アリアドネの衣裳と背景の海は同じ青ですが、アリアドネの衣裳は ultramarine 群青色^{ぐんじょう}で海は azurile の緑青色と、微妙に色が違っていています。それによって、アリアドネがはっきりと立っていることが分かるのです。右側の群集の、肌の色の、黄色から濃褐色までの gradation も鮮やかですが、その背後の木立の緑のそれはどうでしょう。初夏の新緑から盛夏の濃緑、そして初秋の褐色がかった緑色まで、木の葉の緑の美しさがここに揃っているのです。

いろいろ申しましたが結論として申したいことは、このように陽気な色彩鮮やかな絵の中に、寂しさと荒地を読みこもうとするラムは、この絵を理解できなかったということです。換言すれば、このような若者の描いた若者向きの絵を、続エリア随筆のラムは、老人の目で見たということでしょう。

* * * *

すこしくどいようですが、この点をもうすこし確証するために、ただ今はラムの美術批評を見ましたので、こんどは彼のシェイクスピア批評についてすこしく見てみたいと思います。それは「舞台上演の適否の点から見たシェイクスピアの悲劇について」というものです。シェイクスピアの悲劇は、舞台上演されるのを見るよりも、書斎で読むのに適しているとし、シェイクスピアの悲劇をいわゆる「書斎劇」だとする有名な議論です。

たとえば『オセロ』です。若い高貴なヴェニスの婦人が、恋の力により、また自分の愛する男の長所の認識から、親せき、国籍、肌の色など一切の考慮を捨てて、石炭のように黒いムーア人と結婚するのをテキストで読むのは、むしろ快いのだが、オセロとデスデモーナの求婚と結婚の愛撫が実際に舞台上演じられるのを見るのは、不快だとラムは言うのです。もっとも、人種差別を罪悪と考える今日のわたしたちには、それほどではありませんが。ラムの結論はこ

うなのです。「われわれが舞台の上で見るのは肉体と肉体的行動だ。われわれが読書において意識するのは、ほとんどもっぱら心とその動きだ。そして同じ劇が読む場合と見る場合とではそんなにしばしば非常に違った種類の喜びをわれわれに与えるということの理由は、ここにあると考える。」

『ハムレット』の場合も同様で、ハムレットの独白は、彼の心の動き、「孤独の思索」「静かな冥想」であって、役者の elocution によって表わしうるものではないとラムは言うのです。

ところで、これらの劇は、読む劇とは別物になるとはいえ、上演することができる。しかし、『リア』は上演することができない、とラムは主張します。ラムの意見はこうです。

リアの偉大さは肉体的な次元ではなく、知的な次元にあるのだ。彼の情熱の爆発は火山のように恐ろしい、それは、まき起こって、莫大なすべての富をもつ彼の心という海を底まで暴露する暴風雨なのだ。あばき出されるのは、彼の心だ。この肉と血の問題は、考慮を払うにはあまりにもくだらないものに思える、彼自身それを無視したように。舞台の上では、われわれは肉体的な衰えと弱さ、憤りの無力さ以外のものを見ない。が、われわれがそれを読んでいる間は、われわれはリアを見なくて、われわれがリアになる——われわれは彼の心の中にはいり、娘たちや暴風雨の悪意をくじく壮大さに支えられるのだ。

ここでラムが主張するのは、われわれがリアを読むとき、前の二つの劇の場合のように主人公の心を見るばかりでなく、われわれがリアになり、彼の心の中にはいるということです。このラム自身が老人リアになるという言葉は、ラムのシェイクスピア批評もこの老人の立場に立つことを、はからずも告白するものではないでしょうか。

ラムはシェイクスピアの悲劇の上演の不適切さを論じる、その口の下から、「わたくしが何年かむかしシェイクスピアの悲劇をはじめて見たときにうけたまさに最高級の満足を忘れるほど忘恩者にはなりたくない」と、このシェイク

スピアの悲劇を見たときの「若いころの喜び」を卒直に述べているのですが、人間は年を取るにつれて、役者のセリフまわしの早いテンポについてゆけなくなり、書齋でゆっくりテキストを読むことの方を好むようになるのではないかと、思うのです。ラム自身も、たとえばマクベスのような「シェイクスピアの人物は、その行動についての興味や好奇心の対象であるというよりも瞑想の対象である」と述べているのです。こう考えますと、ラムのシェイクスピア批評も、やはりこういう老人の立場からの批評であることが断言できそうです。

* * * * *

以上大変長々とラムの絵画とシェイクスピアの批評について見て参りましたが、結論的に言えることは、どちらの場合にもラムはものを老人の目で見、老人の立場からこれを批評しているということです。しかし、このラムの態度は、彼の批評ばかりでなく、彼の文学一般にも通ずる、彼の最も著しい特徴のひとつなのです。ラムの最も人口にかいしゃしている詩に前に申しました ‘Old familiar faces’ というのがありますが、彼の二つのエッセイ集もこの Old familiar faces をなつかしむ若い頃の思い出が主流をなしているのです。

一、二例をあげてみましょう。ラムが最切に書いたエッセイは、彼が最初につとめた The South Sea House の思い出を書いたものですが、これは、面白いことに、二重の思い出になっているのです。すなわち、ラムは、自分がつとめていたころの会社の同僚の誰彼の思い出を書く前に、史上 ‘South Sea Bubble’ として有名な、この会社の恐慌事件の思い出を書いているのです。これは、ご存知のように、南海貿易に対する独占権をもって設立されたこの会社が、南海への夢にあおられて一時株価が千ポンドから一万ポンドに暴騰するが、やがて暴落して多数の倒産者を出すという事件ですが、ここに今日わが国でも騒がれている Bubble 崩壊の原型を見る思いがして、興味深いものがあります。

もうひとつは、‘Christ’s Hospital Five and Thirty Years Ago’ というエッセイです。生徒たちの日常の生活、様々なタイプの先生のこと、そして一緒に学んだ学友たちのことと、ラムが少年時代に学んだ母校クライスツ・ホスピタルの思い出を綴ったものです。内容についてはこれ以上申しませんが、最後

に学友 S. T. コウルリッジの思い出を叙したコウルリッジ賛美の言葉をあげておきましょう。

サムエル・テイラー・コウルリッジ——論法家、形而上学者、詩人よ——前途に燃える円柱のごとき希望をもち、——暗き柱はまだ出てこず——若き空想に満ちた姿で、記憶によりみがえれ！——君がイャンブリコスやプロチノスの神秘思想を深い甘美な抑揚をつけて披露するのを聞き（というのも、まだそのような年ごろにもこのような哲学の飲み物に顔色を変えなかったからだ）あるいはホーマーやピンダーをギリシア語で朗唱するのを聞いて、たまたま回廊を通った生徒が感心し我を忘れて立ち止まるのを、わたしはどんな思いで見たことだろう——その間、古い修道院の校舎は、この靈感をうけた慈善学校の生徒の口調に反響を返すのだった。

これらの言葉は、若き日のコウルリッジの学才を証言するものとして、コウルリッジの伝記にもしばしば引用される有名な一節ですが、コウルリッジの早熟な天才ぶりをなんと如実に物語るものでしょう。

さて、人間というものは、若いころには、将来のことで頭がいっぱいで、過去のことに目を向ける余裕はないのですが、年を取って残された将来を少なく感ずるようになりますと、自然に過去の方に目が向いてくるものでありまして、私などにも、以前に読んだときより、このようなラムの過去の追想記は、より身近に感じられるのです。しかし、ラムの書いたエッセイのなかで、私など老人にもっと身近に訴えるものは、ずばり老人の心境を書いたエッセイです。『エリア随筆』の‘Dream Children: A Reverie’、『続エリア随筆』の‘The Superannuated Man’、‘Old China’ などですが、いずれもラムのエッセイの中で一段と光彩を放つ傑作です。最初のエッセイ ‘Dream Children’ も、ラムが、自分を捨ててほかの男と結婚した昔の恋人との間に子供の出来ている夢を見て、その夢の子供たちに大おばあさんの話をしてやるという、いかにもいじらしいラムの気持がよく出たエッセイで、ラムのエッセイの名品中の名品ですが、残念ながら？ 私にはなんとか妻子があり、このラムの気持を本当に味

わかるかどうか疑問にも思うのです。そこで、もっと直接に私の現在の心境に訴えるあとの二篇について話してみたいのですが、‘The Superannuated Man’の方はのちほど話に出ますので、ここでは‘Old China’を例にとつてこれについてすこし詳しくお話してみたいと思います。

* * * * *

これは、ラムの老後の生活を若いころの生活と比較して考えるという、老人の心境を過去の追想と結びつける、ラムのエッセイのだいご味の集大成の趣きをもつものです。

まず表題の old china, ラムが最近買ったもので、今ラムは姉のメアリ（エッセイではカズン・ブリジェット）と一緒にお茶を飲んでいる中国の古陶器です。話はこの古陶器に描かれた、古拙ではあるが雅致に富む、中国の男女や風景の絵のせん細な鑑賞に始まり、ヴァリエーションをもたせた、同じ中国の男女の描写に終わっているのです。この巧妙に仕組まれた枠組の中で、二人の対話は進行するのです。

対話は、ラムが古陶器を指さして、こんなものを苦勞なく買えるようになった今の境遇を謳歌する言葉に対して、メアリが貧乏な昔の方がよかったといろいろな例をあげて反撥する言葉に始まり、ラムがそれは貧乏だからではなくて若かったからではないかとさらにメアリに反発する言葉で結ばれるのです。

メアリのあげる例は、ボーモントとフレッチャーの二つ折判を古本屋で見つけて買った話、レオナルド・ダ・ヴィンチの擬作の版画を買った思い出、郊外へ手弁当でピクニックに行った楽しい思い出、つんば敷で芝居を見たときの喜び、初物のストローベリーを食べた楽しみ、大みそかに一年の収支決算をして新年への希望に胸をふくらませた思い出、いろいろ面白いものがありますが、ここでは、今の私の心境にもっともびったりくる例として、ひとつ、最切にあげましたボーモントとフレッチャーの二つの折版を古本屋で見つけて買った話を紹介してみたいと思います。

あなた、案山子のように体に掛けていた、きつね色のスーツ、おぼえていて？ すっかりすり切れてしまって、友だちが随分あなたを冷やかしたものだわ。それもみんな、コヴェント・ガーデンのバーカーから夜おそくかかえ

て帰ったあのポーモンとフレッチャーの二つ折本のためよ。何週間もの間それを眺めながら、土曜の夜の十時近くまでそれを買う決心がつかなかったこと、おぼえていて？ そのときになってやっと、人に先におられるといけな
 と思って、あなたが家から出かけてゆくと、本屋の老主人はぶつぶつ言いながら、店を開け、きらきら光るろうそくの光で（というのは彼はもう床につくところだった）ほこりにまみれた宝物の中からその書物をさがしてくれ、あなたが二倍も重かったらなどと思いながらそれをかかえて帰って私に見せてくれた
 のでした。それから私たちは欠けたページがないかどうかを調べ、私がはずれたページをのりではっている間も、あなたはもどかしがって夜明けまでじっと
 待っていられたのでした。——貧乏人であることに楽しみがなかった
 でしょうか？ あるいは、私たちが金持で気むづかしくなった今、あなたが
 着ている、注意深くブラシをかけた小ざれいな黒の服は、あの着古したスーツ
 で大威張りで歩き回ったときの正直な虚栄心の半分でもあなたに与えることが
 できるでしょうか？ それは、あなたが古びた二つ折版に浪費した——15シリ
 ングか16シリングの大金——私たちは当時はそれを大へんなものと思ったの
 です——のために、4、5週間服を新調するのを見合わせたからなのです。今
 では、あなたはいくらでも好きな本が買えます、けれどあなたがりっぱな古本
 の買物を持ってくるのにお目にかからないのです。

これは私たち本を集めることを楽しみにする者たちにとっては、胸にしみる
 話ではないでしょうか。私などのように金ばかりでなく本もなかった戦時中か
 ら終戦後に本を集め始めた者にとっては、なおさらです。私自身、終戦後の露
 店で戦災のために表紙がなんとなく黒ずんだラムの全集を手に入れたときの感
 激が今よみがえってくるようです。そういえば、いくらでも好きな本が買える
 ようになった昨今は、皮肉なことにあまり本を買わなくなったようです。

* * * * *

以上、私はラムの文学を自分の身にひきつけながら、老人の文学として見て
 参りました。それでは、このラムの老人じみた懐古的な文学は、若き日の革新
 の情熱に燃えるロマン派の詩人たちの間で、どのような位置を占めるのでしょ
 うか？ 今度はすこしく視点を変えて、このラムとロマン派詩人たちとの関係

を見てみたいと思います。

まず、先に述べましたクライスツ・ホスピタル時代の学友 S. T. コウルリッジです。ラムは、前述のように、少年時代からコウルリッジの天才に敬意を表していますが、彼から直接受けた影響は少ないようです。もしあるとすれば、それは批評の領域で、たとえば、『ホガースの天才と性格について』の中で、ラムはコウルリッジの想像力説らしいものを援用しているのです。すなわち、ラムはホガースの想像力を規定して、「すべてのものをひとつに引き寄せる力、生命あるものと生命なきものをして、またそれぞれの属性と主題と付属物をもつ存在物をして、ひとつの色彩を帯びさせ、ひとつの効果に奉仕させる力」というのです。

しかし、これは、敬愛する友人コウルリッジへの単なるホマージュにすぎないのです。というのは、ラムは、このホガース論においても、前述のシェイクスピア論においても、もっとしばしば用いるのは、印象批評の方法で、実際に、「ホガースの描く人種の悪らつさと無価値さの印象」とか「われわれがシェイクスピアのリチャードを読むときに受ける印象」とかと、批評における印象を重んじているからです。この点で、ラムは批評においては、むしろ、ハズリットとともに、ペイターを先駆ける印象批評家というべきでしょう。

つぎはワーズワスです。ラムはワーズワスとも親交があり、一度湖水地方にワーズワスを訪ねたこともあります。そしていくつかのエッセイでは田園への憧れを垣間見させる場合もあり、‘Blakesmoor in H-shire’におけるように、「人は死んでもまったく死んでしまうわけではない」と、ワーズワスの靈魂不滅説を暗示する場合があります。しかし、全体として見るとき、ロンドンに生れ、ロンドンを描きつづけたラムの関心は、けっしてワーズワスの新しい自然崇拜にあるのではなくて、旧態依然たる都会崇拜にあるのです。

最後にキーツですが、キーツだけは別です。ラムは、キーツとは、コウルリッジやワーズワスとほど親密な交友関係にあったわけではありませんが、情情的にはもっと近い関係にあったのです。ラムは死の前年、ギリシア美の消え失せた世界についてもアレゴリカルな抒情詩を書きましたが、もしキーツが生きていたらどんなにか共鳴したことでしょう。この、キーツと共通する、ラムの

唯美的態度は、ペイターの「芸術のための芸術」の説の先驅をなすのです。そしてペイター自身、彼の同情のこもった、*Appreciations* の「チャールズ・ラム論」の中で、こう明言するのです。「彼は、散文を書くさいに、キーツが詩を書くときと同じくらい完全に、芸術のための芸術の原理を実現する」と。

それでは、このラムの態度は、実際にどのように「芸術のための芸術の説」を先驅けるのでしょうか？ 少し余談になりますが、さきほどお預けにしました‘The Superannuated Man’を手がかりにして、この問題をすこしく検討してみたいと思います。

* * * * *

このエッセイはラムが36年間つとめた東印度商会を退職したころの心境を叙したものです。ここには、ラムが突然退職を言い渡されたときの驚きと年金の額の意外な多さへの喜び、退職後の、執事をおいて管理する必要があるほどの大地主になったような、時間の大金持になった誇らしい気持と、以前には、日曜には日曜の気持、月曜には月曜の気持と、その曜日独特の気持というものがあったが、それがなくなった淋しい気持など、退職時の悲喜交々の気持が大変よく描かれていて、私など同じ境遇にある者——私も今年4月に佛教大学を退職しましたが——には、その気持が大変よくわかるのですが、このことはしばらくおくことにして、早速問題に入りましょう。

まず文頭の、ラムがまだ会社につとめていたころの日曜や休日の思い出です。そのころ彼は日曜や休日を「快樂の止むことなき追求に費やした」とか、「それを最大限に利用する方法を見いだそう」とつとめたとか、あるいは「それから最大量の快樂を得よう」と苦勞したとか、いつているのです。ところが、ラムは、自分がこんなことをするのは、日曜や休日が少ないからだということです。ですからラムは、昔の短い休日には、それを最大限に活用するために、たとえば一日に30マイル歩いたものだが、毎日が休日になった今日では、そんなことはしないということです。

それに対してこのエッセイの最後の結論はこうです。

人間は自分にいくら時間が多くあっても多すぎるということはないし、

することがいくら少なくとも少なすぎるということはない。人間は、仕事に従事するかぎり、水を離れた魚のようなものだと私は本当に信じる。私は完全に観照的生活の味方だ。

さて、このラムの議論では、最初の「時間を最大限に活用する」という言葉と最後の「観照的生活」を重視する態度とは必ずしも一致しないのです。いわば、後者の議論は、前者の部分的な否定の上に成り立っているのです。そしてこの二つの議論を矛盾することなく自分の「芸術のための芸術」の理論の中に統合したのが、ペイターだということができるのです。

まず「時間を最大限に活用する」という議論から。それは、ペイターが彼の「芸術のための芸術」の説を最初に闡明した *The Renaissance* の ‘Conclusion’ の中に見いだされます。ペイターはここで、ラムの議論を休日の枠から外し、一般論として持ち出します。そしてラムが時間から最大量の快楽を得ることを説くように、瞬間瞬間を「最大多数の活力がその最も純粋な力で結合する焦点」につねに身を置くことをすすめるのです。そしてこのような瞬間につねに身を置くことを、あの有名な言葉で、「この固い、宝石のような焰とともにつねに燃えること」と形容するのです。そしてこの量の問題が質の問題に転換される時、「芸術のための芸術」の説が生まれるのです。「というのは」とペイターは ‘Conclusion’ を結んで申します。「芸術は、過ぎゆくあなたの瞬間に、ただ最高の質だけを、そしてただその瞬間のためだけに、与えることを率直に申し出ながら、あなたのもとへやって来るのだから。」

つぎに、「観照的生活」重視の問題で、これは *Appreciations* の「ワーズ論」中のつぎの言葉に当たるでしょう。ペイターはここではラムの「仕事に従事する」(operative) と「観照的」(contemplative) の区別を行為 (action) と観照 (contemplation) の区別に置き換えています。それはこういうものです。

人生の目的が行為でなく観照であり、なすこと (doing) から区別されたあること (being) であるということは、……なんらかの形でより高次の道徳の原理なのだ。詩や芸術において、もしあなたがいやしくもその真

の精神にわけ入るならば、あなたはある程度この原理に触れるだろう。詩や芸術は、まさにその不毛性のゆえに、単なる見る喜びのために見る、ひとつの典型なのだ。

ここには、表現こそ違え、‘Conclusion’と同じペイターの「芸術のための芸術」の主張が込められているというべきでしょう。

ここで話を先へ進めましょう。時代はさらに下って話はモームになります。モームは一面において、ペイターの衣鉢をうけつゝ審美主義者ですが、彼の自伝的小説『人間の絆』を取ってみましょう。

主人公フィリップは少年のころハイデルベルクへ勉強に行きますが、そこでヘイワードというペイターの心酔者に出会います。しかしヘイワードは、ペイターを通してラムをも見ているようです。ラムのように、ギリシア美の礼賛者であると同時に事務員というものを批判しているからです。彼はウィークスという事務員についてこう言います。

もちろん、あの男は術学者だ。あいつは美にたいしてほんものの感情をもっていないのだ。正確さというものは事務員の美德だ。ぼくたちが目ざしているのは、ギリシアの精神なのだ。ウィークスは、ルービンシュタインを聞きにいった、調子はずれの演奏をしたと文句をつけたあの男みたいなものだ。調子はずれだって！ すばらしい演奏をしておれば、そんなことがなんだというのか？

フィリップはこんなヘイワードの言葉に耳を傾け、次第に友人の審美主義によって洗脳されてゆきます。彼はやがてハイデルブルクから帰り、一時ロンドンで事務所につとめるのですが、そこへヘイワードから一通の手紙が届きます。それは、ヘイワードがフィリップに、青春を浪費する事務所つとめなどやめて、前述のペイターの言葉で、堅い宝石のような焰をもって燃える、画家になるようにすすめるもので、次のような文面です。

きみがそんな生活に我慢できるのが不思議だ。フリート街やリンカーンズ・インのことを考えると、いやで身ぶるいがでるくらいだ。人生を生きるに値するものにするものは、この世に二つしかない。愛と芸術だ。きみが事務所にすわって元帳をのぞきこんでいる姿なんか、ぼくには想像もできない。やっぱりシルクハットをかぶって、こうもり傘と小さな黒鞆をかかえているのかい？ ぼくの気持だと、人間は人生をひとつの冒険とみなさなくてはならぬ、堅い宝石のような焰をもって燃えなければならぬし、一かばちかやって見て、わが身を危険にさらさなくてはならぬ、ということだ。なぜきみはパリへいって、絵を勉強しないのだ？ きみには才能があると、ぼくはいつも考えていたのだ。

ここには、たしかに、今述べましたように、ペイターを通して見たラムの世界があるのです。言い換えれば、ラム発ペイター経由の審美思想が、このような形でモームまでたどりついたというべきでしょうか？

* * * * *

少し脱線しましたが、最後にラムに戻ってひと言^{ことば}。今日、わが国でもレジャーの必要が叫ばれ、今日は余暇時代だとも言われています。ラムこそ、このような余暇の時間に読むのに最もふさわしい作家ではないでしょうか？ 私はラムの文学の老人性をあまり強調しすぎたかもしれません。ラムのエッセイには、たとえば、最近わが国でもよく知られるようになりました Valentine's Day を扱ったものとか、Roast Pig の起源を説いたものなど、老若を問わず誰が読んでも罪のない面白いものも多いのです。皆様は、ワーズワス、コウルリッジ、バイロン、シェリー、キーツと、それぞれご専門のご研究にお忙しいことと存じますが、どうか少し余暇をお作りになって、ゆっくりとラムをお読みになる機会をもっていただきたいと念願する者です。このラムへの招待の言葉⁽¹⁾をもちまして、私のつたない話を終らせていただきます。

(1) イギリス・ロマン派学会第17回大会における特別講演の原稿による。